

研修報告書 No.22

所 属： 昭和大学病院

氏 名： 川澄 宏

研修先： 大井田病院

この度は、高知県宿毛市の大井田病院で研修できたこととても嬉しく思います、多くの貴重な経験をさせて頂きました。地域医療研修で関わってくださった病院の皆さんには感謝しかありません。

私自身の研修病院では、医療機器は一通り揃っており、細かい検査結果もすぐわかります。詳しいデータがわかる分、機械に頼ってしまい、身体診察がおろそかになっていることが多いです。例えば、腹痛で患者さんが来院した際、エコーをせずすぐに CT 撮影するなど、答えを急いで出そうとしてしまいます。しかし地域の病院では、限られた条件の中でどれだけ質の高い医療ができるかが大切です。つまり、医師にとって基本である、問診、身体診察が非常に重要になってくるのです。

この研修で、自分の知識や診療技術の無さを痛感し、勉強したいところだけを限定的に勉強している愚かな自分がいたことに気づきました。自分自身に対しての甘えや過信があったと思い、研修中はできるだけ経験を積もうと努力し、腹部エコー、外科外来、救急出動、緊急搬送など、やれることに対して貪欲に臨み、吸収していきました。

へき地医療ではジェネラルでなければならず、究極言うと内科、外科といった区別はないとまで言えるのではないのでしょうか。内科であっても、縫合、骨折の整復、創傷処理はできるべきなのです。また、大井田病院の先生方は、自ら能動的に動き、学ぶ姿勢があり、理想的な医療が行われていました。自分自身もそうでありたい、そうでなければならぬと感じるばかりでした。

たくさん経験した中で、印象的だったことが2つあります。1つ目は、乳児検診のお手伝いをさせて頂いた時のことです。1年間でその地域で生まれる人数は5~20人で、医療スタッフ全員が、乳児のことを把握していました。人数が少ないからということもあると思いますが、医療スタッフがまるで、親、家族のように子供に接していることに感銘を受けました。都会にはない光景であり、田舎では子供という宝物を地域全体で大切に育てているのでしよう。

2つ目は、訪問診療の一貫として、看取りを経験させて貰った時のことです。肝がん末期で、家族も死の準備はある程度できている方でした。患者さんを家で看取る、これは僕が働いている病院ではまず有り得ないことです。地域に密着し、家庭に寄り添った訪問診療をしており、信頼関係があるからこそ成り立つのだと感じます。

1世代前は、都会でも病院で看取るより、家で看取る方が多かったと聞きますが、時代が

進むにつれ高齢化、共働きなど色々な要因で、看取りの環境も変わってきたのでしょう。今、コロナ禍では入院中に亡くなった場合は、家族と面会も難しくなってきます。時代が変化している中、こういった最期が患者さん、家族にとって正解か考えていかなければならないでしょう。

私は循環器内科に進み、どちらかといえばスペシャリストの道を進もうとしています。循環器内科だから、心臓のことだけでできていればいいといった思考になった時に、この地域医療研修を思い出したいです。循環器内科である前に内科医であり、医師である前に、人間であることを忘れずに、病気を物質的に視るのではなく、人を診ることを肝に銘じていきたいです。

最後にこの宿毛という地域がとても素敵な街だと感じ、海、山、食、すべて魅力的で、住み心地が最高でした。1ヶ月と短い間でしたが、非常に良い経験になりました、またどこかでこの経験を還元できたらと思います。そして、四万十の夜空に輝く星の様に苦しむ人を慈悲の光で照らしていきたいと思います。